職業奉仕部会

アドバイザー・パストガバナー	岩波　政雄（甲府北）
リーダー・次期職業奉仕委員長	青柳　明男（甲府北）
サブリーダー・次期職業奉仕副委員長	中村　光次（清　水）

報告者名：青柳明男（次期職業奉仕委員会委員長）

司会・中村光次サブリーダー

本年度は、井上ガバナーエレクトの方針の中にもありますように、「率先しよう」という基本テーマのすぐ後に「職業奉仕と親睦」をということで職業奉仕が表にでてまいりました。今までにはたぶんなかったことではないでしょうか。そういった意味でこの職業奉仕委員会の活動というものが改めて認識される大変重要な年度ではないかと思います。

アドバイザー・岩波政雄パストガバナー

職業奉仕という言葉は、アーサー・フレデッリク・シェルドンが提唱した言葉でございます。この人は職業奉仕について非常に造詣の深い人でありまして、「シェルドンのロータリーモットー」で名をはせております。シェルドンが職業奉仕をどのように定義しているかというと、職業奉仕とは「自分の幸せは自分の近くにいる人の幸せと無関係ではない。良質の職業人は自己改善を重ねて自分の職場を健全なものにして、自分のところの従業員とか関係ある外部の人たちの幸せを求めていく。そしてその心を持って事業をすれば必ず成功するだろう。さらに、その成功するだろうということを自分で確かめ証明してみせることである。」と云っているのでございますね。自分の事業で実践すれば必ずや事業は隆盛に発展すると示唆しているのでございます。

そこで、自己改善を重ねるということが非常に大事なこととなってきます。自分の考えていることを変化させなくて何時までもそれに固執する傾向にあるのが人間というものですが、やはり自分を改善していかなければいけない。世の中が変化するように自分の考えあるいは動きも変化させていかなければいけない。世の中の変化につれて自分も変化していくぐらいの先の見通しがなければ駄目だということが云われているわけでございます。シェルドンは仕事に対して非常に熱心な方でありました。自分が自らの職業で実証して、地域の職業人たちに職業に対する倫理の必要性を伝えていかなければならないと云っているのです。こうした話は皆さんよく聞かれるだろうと思いますが、最近中央へ行って、またわれわれがガバナー就任前にアメリカへ行って研修したときにも、職業奉仕が未だそれほど問題になっている状況ではなかったが、これについて非常に熱心に話をされていた人がおられました。

ロータリアンにとって職業がなぜ重要かというと、われわれが職業を通して地域に奉仕するのが仕事なのだからです。職業を通して地域に奉仕する。これをどういう方法でやるのかは、各人がそれぞれ自分の信念に基づいて考えていく事が大事でございます。人から教えられることも大事だが、自分には自分の信念というものがあるわけですから、つまり職業に対してはこういう信念がある、こういう生き方があるというようなことを通して、多くの人に平和あるいは良い世の中をもたらしたいと願ってやって欲しいということをエバンストンの本部のほうから痛切にいわれたことがございました。皆さん方もその点は十分ご理解されていると思いますが、やはり職業というものが、自分の職業が安

定してきてはじめて奉仕の道へ進めるわけでございまして、職業人としての自分自体の職業が安定していないとなかなかその方向へ進めるわけにはいきません。昔から、職業の重要さというのは、これはロータリーに関係なく云われているわけでございます。ところが、それに余りに固執して何時までも変化なしにじっと守っているという保守的な考え方の人がいる一方、職業はどんどん進歩していくからその進歩に応じて変化させて自分もそれについていこうとする考え方の人たちもいるわけでございます。そのどちらが良いか悪いかは、個人の考えでありますからどちらが良いとも悪いともいえません。

ロータリーというものは自分という個人が地域社会に奉仕するもの、つまりは自分の職業を通して地域社会に奉仕するということが職業奉仕の最大の目的でございます。それぞれ自分の職業を大事にしながら、地域社会への奉仕に向かうという方法をとって、今のロータリーがまさにその方法をとって進んでいるわけでございます。ロータリー本部のほうでもこの問題を非常に重要視しております。職業奉仕という領域は、職業人が自分の職業に適用すべき、言うならば職業奉仕というのは職業における倫理運動だということでございます。職業の倫理というものはどういうものであるのかということを、これからみんなで考えていく。そうしてその倫理を定着させる、これを向上させるといいますか、そういう方向に向かっていくのが職業奉仕の道だろうと思うわけでございます。

職業倫理、これはよく言われている言葉でございまして、いろいろな領域の問題に対しましていろいろなロータリーの芽が出てくるわけですが、それとは全然別個なものとして職業奉仕は存在していかなければならないでしょう。自分の職業をやはり大事にする。その大事にした職業から出発して奉仕のほうへ入っていく。自分個人の職業というものを自分の信念、自分の人柄で向上発展させていく姿に、地域の人たちが「ああいう素晴らしい人たちのやることは良いなあ」という感じを持ってくるとロータリーは発展していくでしょう。そういう事もなしに、ただ漫然としてロータリーを送っていくということになると、ロータリーがどういうものであるかということが分からなくなってまいります。皆さんもひとつ、地域の素晴らしい職業人になっていただいて、大いにロータリーに奉仕していただきたいと思うわけでございます。

いろいろな所で話を聞くとそれなりに勝手気ままなことを言っている人もあれば、一方的に言われたことをモロに受けてその通りやっているところもあります。しかし人から教わって云々ではなくて、自分自身で職業の重要さを理解するとともに、職業を大切にしながら仕事を通してロータリーのほうへ目を向けていただきたいと考えているわけでございます。いずれにしましても、皆さんはクラブにおいて職業奉仕という領域で職業奉仕委員長を務めるわけでございますが、どうかこれがロータリーの根源であり、その根源にある仕事をやるのだという意識を持って大いに頑張っていただきたいと思うわけでございます。

青柳明男委員長方針＆事業計画説明

「職業奉仕って何か漠然としていてよくわからない」、「職業奉仕は難しくてよく理解できない」、そして「職業奉仕委員会は何をすればいいんだろうか」、「結局自分の仕事を一生懸命やれば、それが職業奉仕なのだろう」といった声がいまだに聞かれます。そんな声に答えるために、現年度、鈴木年度では、「職業奉仕を考える」というパソコン用スライドーこれは 20 枚のスライドにナレーションを入れ自動でスライドショーが行えるようＣＤに焼きこんだものですが、これを 2005 年８月末に作り終え、直ちに地区全クラブに郵送しました。みなさんにご覧いただけたものと思っています。

その中で、職業奉仕はロータリーの原点でありロータリー運動の根幹であるということを繰り返し強調しましたが、それは、原点であり根幹である職業奉仕の何たるかが分からないとロータリーが分からなくなってしまうからです。そしてひいては、例会を毎週やる意味も、例会がなぜ重要かという意味も分からなくなります。わからない状態が長く続けば、例会の魅力、クラブの魅力そしてロータリーそのものへの関心も薄れて、単なる昼食会、単なるボランティア団体なのかということになって、ついには退会に繋がっていってしまいます。

配布資料の中にあります「奉仕の一世紀」抜粋第 13 章職業奉仕の初めのほうの一節のなかに、『永

年にわたり、ロータリアンにとって職業奉仕を簡潔に定義することは容易くはなかった。ロータリアンはクラブ奉仕で培う仲間意識、社会のニーズのために奉仕する満足感、国際奉仕が世界平和に貢献するという期待に喜びを見出してきたが、職業奉仕は説明しにくかった。子供の命を救うことや、障害者に車椅子を提供すること、国際親善奨学生を遠国に送ることなどに比べて、やりがいの面で遜色があった。このため、職業奉仕は「忘れられた奉仕部門」と呼ばれることもあった。違いはもう１つある。クラブ奉仕、社会奉仕、国際奉仕の活動には通常ロータリアンが集団で参加するが、第二の奉仕部門である職業奉仕は、個人で行うのが普通である。』というくだりがあります。

「職業奉仕を簡潔に定義することは容易くはなかった」、「職業奉仕は説明しにくく、子供の命を救うことや、障害者に車椅子を提供すること、国際親善奨学生を遠国に送ることなどに比べて、やりがいの面で遜色があった。」、「職業奉仕は〈忘れられた奉仕部門〉と呼ばれることもあった。」

本当にそうでしょうか。本当に定義が難しいでしょうか。職業奉仕は他の部門に比べて遜色があるのでしょうか。また職業奉仕は「忘れられた奉仕部門」でしょうか。たしかにそういわれても仕方がないような現実の中におかれているのは事実です。しかし遜色があって忘れられたと思わざるを得ないようにしたのはRI自身であり、その責任はRIにあると私は思います。

これにつきましては昨年の地区協においても同じ事を申し上げました。

1990代に入ってからの国際ロータリーの流れはボランティア活動へ、特に国際ボランティア活動へ傾斜してきており、ロータリーの第二標語の廃止運動はその最たるものでありましょう。今の国際ロータリーの姿は、ロータリー財団を核にした国際ボランティア活動主導の傾向を色濃く反映しているように思えてなりません。しかし私たちは、ロータリーがロータリーであるためには職業奉仕の理念を決して風化させたり骨抜きにしたりするような動きに同調してはならないのです。私たちはロータリアンの在り様として職業奉仕を実践し、ロータリークラブの在り様として職業奉仕団体としての特質を堅持し、自分たちの存在理由を守りかつ保持しなければならないと考えている次第です。

さてそこで、職業奉仕を定義することがそんなに難しいことかどうか考えてみましょう。以下申し上げますことは、Rotary International、Rotary Japan Web、ロータリーの源流（ウェブ・マスター：田中毅2680地区PDG）などのウェブ・サイトに公開されています資料、文献から引用あるいは参照させていただいています。ついでながら皆さまのご活用もお奨めいたします。

職業奉仕というロータリーの専門用語は、アーサー・フレデリック・シェルドンが提唱した独特の概念であることは皆様ご承知の通りであります。ですからシェルドンは職業奉仕という言葉にどんな意味を担わせているかということを理解するということが出発点になります。He profits most who serves best（最もよく奉仕する者､最も多く報いられる）は､ロータリーの職業奉仕理念の提唱者シェルドンの余りにも有名なロータリーモットーであります。シェルドンはこのモットーによってどういう事を説いたのかみてみます。

シェルドンは、職業奉仕とは次のようなものだと説いたのです。

まずロータリアンは、「自分の幸せは、自分の周りにいる人々の幸せと決して無関係ではない。良質の職業人のなすべき事とは、自己改善を重ねて、自分の職場を健全に守ると共に、取引先・下請け業者・従業員・顧客など、自分の事業と関係を持つすべての人に幸せをもたらすことである。そして、その心を持って事業を営めば、必ず最高の利益が得られることを自分の職場で実証することである」という職業上の実践的な倫理観を持たなければなりません。そして「実証することそれ自体が、そのような心のあり方の必要性を地域全体の職業人に伝えることになるのだ」と考えるのです。倫理観に支えられたこの考え方を理念と呼ぶのでありますが、これをただ頭の中で思うだけではなく、実際に「そのような考え方で毎日の職業生活を営む」のです。このことをシェルドンは職業奉仕といったのです。そしてわれわれは、職業奉仕はまさに「職業を通じて行う奉仕」であり、と同時に「職業は奉仕の機会」であることを理解するのです。

He profits most who serves best でシェルドンが述べた　Profits　とは金銭的利益そのものであっ

て、我々東洋人が陥りやすい発想である「無償の精神的な喜び」とは別次元の発想であることに留意する必要があります。
「職業奉仕を根幹としたロータリー運動というのは、すなわち倫理運動である」ということを理解しておく必要があります。ですから、ロータリークラブは、寄付や慈善の団体でもボランティア団体でもありません。良質な職業人の倫理運動なのです。逆説的な言い方になりますが、このロータリー運動は倫理運動であるという視点を見失いますと、職業奉仕というものが判らなくなります。ひいてはロータリー自体がよく判らなくなってしまうのです。

では、ロータリーが倫理運動であるということが、一体どこに書いてあるのかといいますと、「社会奉仕に関する 1923 年の声明」、いわゆる決議 23 － 34 の中にあります。また、「ロータリーの綱領」の中にあります。これらを読めば、ロータリーがまさに倫理運動であるということが一目瞭然に解るだろうと思います。

ロータリーの本質を確立し不動のものにしたといわれます、1923 年セントルイス大会で採択された「社会奉仕に関する 1923 年の声明」、いわゆる決議 23 － 34 の中で、『ロータリーは、基本的には一つの人生哲学であり、それは奉仕－超我の奉仕－の哲学であって、「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践倫理の原理 The practical ethical principle に基づくものである』と定義しています。この声明から、ロータリー精神とは人生哲学であり、ロータリー運動の根幹は自分の職業を通じての倫理運動、つまり職業奉仕にあることが明確に読み取れます。
（しかし残念なことに、「社会奉仕に関する 1923 年の声明」は 2001 年の改正で声明の一番目の項目の文節から、『「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践倫理の原理に基づくものである』という文言が削除されてしまいました。これはまさに国際ロータリーの潮流がロータリーのボランティア化へ向かい、職業奉仕が骨抜きになっていく証左ではないでしょうか。）

次に［ロータリーの綱領］を見てみますと、その本文は「ロータリーの綱領は、有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し、特に次の各項を鼓吹育成することにある。」となっています。目的はただ一つ、すなわち「ロータリーの綱領は、有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成すること」なのですが、その下に 4 項目が付いていますので、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕について述べられていると誤解している人がいるようですが、これは重大な誤りです。この 4 項目は目的を達成するための付帯事項すなわち解説なのです。お手元の資料にある通りです。
そしてここでは、綱領の目的の中にある鼓吹し育成すべき「奉仕の理想」という語句に注目しなければなりません。これがキーワードです。「奉仕の理想」とはなんなのでありましょうか。それは二つのロータリー標語が言っていることを融合させたものにほかなりません。「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」と「超我の奉仕」の二つの考え方をまとめて奉仕の理想と言っているのです。
これを平たく言えばこういうことでしょう。『人間誰しも我欲を持っています。がその一方で他人のために尽くしたい、役立ちたいという感情もあります。その間で気持ちは揺れ動きます。そこで利己的な欲望も認めたうえで、それをロータリーの説く職業における実践倫理でコントロールしながら、個人生活、事業生活および社会生活を通じて他人のために奉仕しましょう』という考え方であります。このような気持の揺れは、私たちは日常生活の中で頻繁に経験していますので、皆さんにもすんなりと納得していただけると思います。これらのことが、ロータリー運動の根幹は職業倫理を基盤にした職業奉仕にあるといわれる根拠でありまして、そういうことからロータリーは職業奉仕団体と定義づけられ、「わたしは奉仕する」I serve をモットーにしてきたわけであります。数多く存在する奉仕クラブの中で、職業奉仕の理論付けと実践を根底に置いて活動をしているクラブは、ロータリークラブ以外にはなく、言い換えれば、職業奉仕クラブであることがロータリークラブの特徴とも言えましょう。
以上申し上げましたことは、手続要覧から転載しました添付資料「職業奉仕の指標」の中の「職業

奉仕に関する声明」、「ロータリアンの職業宣言」や「ロータリーの綱領」を見ていただければ、今まで申し上げたことが箇条書的に明示されていることにお気付きになると思います。いろんな文献や資料を読み、かつ勉強されるとき、頭の中を整理するインデックスとして時折見返されれば非常に役立つと思います。そしてそうすることによって職業奉仕が、知識として身についていくことは間違いありません。

しかし、職業奉仕は知識として学ぶだけで果たして身につくものでしょうか。残念ながらそれだけで身に付くものではありません。職業奉仕の何たるかを学習体験し、それを積み上げていく機会を持たなければならないのです。それではその学習体験をどこで積むことが出来るのでしょうか。つまり、私たちがロータリークラブに入ってロータリーの原点である職業奉仕を学び、奉仕の心を磨くことの出来る場とはどこなのでしょうか。それは例会にほかなりません。毎週一回開かれる例会こそが親睦の場であると同時に研鑽の場でもあると先人たちは教えてくれています。

職業奉仕の理念は、ロータリーの知恵なのです。したがって、知恵を学んでそれを実践する職業奉仕の出発点は、先ず例会出席にあります。ところが、時々「私は職業奉仕が忙しいから例会には出席できません」という人がいますが、実はこれは単に「自分の仕事で忙しいから例会には出席できません」ということを言っている事に過ぎないわけです。「一生懸命自分の仕事をする」ことが、すなわち「職業奉仕をする」ことだと誤解しているのです。単に一生懸命に自分の仕事をしたからといって、ロータリーの掲げる職業奉仕をしているとはいえません。一生懸命に自分の仕事をすることは、ロータリアン以外の人達もしています。極端なことをいえば、資格商法とか振り込め詐欺また耐震強度偽装だってそれにかかわっている者達も一生懸命に自分の仕事をしているわけです。しかし、これを職業奉仕と言う事はできないでしょう。ですから、単に「一生懸命仕事に精出すことが職業奉仕」と考えることは誤解なのです。職業奉仕理念を学びそれを実践するためには、先ず毎週の例会に出席しなければならないわけです。

このように、例会出席を通じて仲間のロータリアンの職業奉仕の実践を学びながら奉仕の心を磨いて、自分の個人生活、事業生活や社会生活の中で自らの奉仕を実践するのがロータリーの真髄であります。ロータリーではこの一連の流れを、「入りて学び、出でて奉仕せよ Enter to learn, go forth to serve.」と表現しているのです。つまるところ、職業奉仕と例会は、実はコインの裏表のようなものです。

これまで何回か触れましたが、近年の国際ロータリー全般の動きを見ていますと、職業奉仕の理念を等閑に付して、と言うより棄て去ろうとしているかのような傾向が強まってきていて、「職業奉仕理念が風化し、ボランティア活動一辺倒になっている」のが、残念ながらわれわれの置かれている現実です。

一人一業種の原則の撤廃、メークアップの規則大幅緩和、出席免除規定の緩和と拡大、裁量休会の増加、試験プロジェクト・クラブとｅクラブの創設など、入会や会員資格継続のための規定を緩め、例会軽視の風潮を生じさせかつ助長した結果、東欧など新興民主主義国やアジア、アフリカや南米の開発途上国において会員数を増やしているものの、ロータリー先発国では逆に会員数をどんどん減らし、歯止めが掛かっていないというのが実態なのであります。

日本でも、会員数は減り続けています。社会構造や産業構造の変化とか人口の高齢化、また所得格差の拡大などが原因とする向きもありますが、実はロータリーの活動がボランティア中心になってロータリーの持っていた職業における実践倫理が、職業奉仕の理念がどんどん崩れていって、ロータリーに魅力がなくなってきた結果のように思われてなりません。職業奉仕と例会軽視の風潮に伴って、ロータリーについての学習も次第におろそかになり、だんだんロータリーが何なのかも分からなくなって魅力がなくなり辞めていく。会員を増強する側もロータリーの何たるかが分からなくなって来ているので、新会員候補者にきちんとした説明もしないまま引っ張り込むような結果になってしまっている。これでは定着もしなければ、増えもしないでしょう。ボランティア活動に参加するのだった

ら、ロータリーでなくてもボランティア団体など山ほどあります。それぞれが、活動目的を絞っていますから何でも屋のようなロータリーより余程分かりやすいと言うものです。日本には現在、NPO、NGO をはじめとするボランティア団体が 11 万９千(2004 年 11 月の出版物)もあると聞いております。ボランティア活動参加が目的なら、自分の目指すものが必ず見つかりますし、高いロータリークラブの会費や寄付金などをそれに充当すれば、十分すぎるほど自分の志を適えることができるでしょう。

したがって、ロータリーが私たちにとって魅力あるものであるためには、職業奉仕理念が風化し、ボランティア活動一辺倒になったといわれる今こそ、私たち自身とクラブが、シェルドンの提唱した職業奉仕の原点に、つまり「ロータリー運動というのは、すなわち倫理運動である」という理解に立ち返って職業奉仕を実践することが、ロータリーを再び、人々をひきつける力のある組織に戻すことの出来る唯一の道だと考えます。以上職業奉仕の理念と実践を中心にお話し申し上げました。

次に地区委員会自体の事業計画と各クラブにご検討をお願いしたい活動目標であります。

地区委員会といたしましては､｢職業奉仕の理念｣の強調にあわせ､私たちの仲間である地区内のロータリアンが現に行っている「職業奉仕の実践」の具体例を訪問取材し紹介する事業を行いたいと思います。それを「職業奉仕の実践倫理としての側面」に対するより深い理解への手掛りと「職業奉仕の実践」への道しるべにしていただこうと考えました。そこでまず、そのようなモデルとなるロータリアンを各クラブから推薦していただき、分区内の会長幹事会等でその中から１名の方を選考のうえ、ガバナー補佐経由で私どものほうへご紹介いただきます。その上で、寄せられました 11 分区 11 人の被推薦者の方々を私のほうで逐次取材訪問させていただき、ガバナー月信をお借りして地区内全会員に逐次ご紹介します。本日の配布資料の中に趣旨説明や推薦基準また推薦用紙など関連資料を加えておきました。本日ご出席の各クラブの職業奉仕委員長様方にお願いでございますが、クラブへお帰りになりましたら会長・幹事さんにご報告いただき早速対象者選びに取り掛かっていただけたらと思います。すでに各分区のガバナー補佐の皆さんには３月 25 日のガバナー補佐研修会にてお時間をいただき趣旨説明とご協力要請を行ってあります。７月 31 日までに対象ロータリアンを確定し、直ちに取材活動に入って、遅くとも９月号のガバナー月信から掲載を開始したいと考えております。

なおここで、先のガバナー補佐研修会で本事業について説明申し上げた際だされましたご質問を参考に補足説明を加えさせていただきます。

分区で一人ということは、他の人は対象から外れるということになりますが、これを漏れたとか落選したとかといった考え方はしないでください。推薦されたどなたも素晴らしい方であるのは間違いないと思いますが、優劣をつけるのではなく今回の事業目的に一番ふさわしい方を皆さんで相談して選ぶという考え方でお願いします。分区の会長幹事会で推薦者を持ち寄り、会長並びに幹事さんが自分の母体クラブの代表者という立場を離れ、ガバナー補佐さんを中心に全員協議で「職業奉仕の実践者」にふさわしい方をお選びください。

なお私は、この事業で特定の人を顕彰するなどといった意図はまったく持っておりません。大きな会社で組織を縦横に動かせる著名な経営者よりも、小さな事業ではあるが目立とうという気もなく善行を積まれている、われわれの身の丈にあったロータリアンを見つけ出し、その在り様を自分のモデルに出来るように紹介するということであります。

推薦された方全員をご紹介できたらどんなにか素晴らしいことでしょう。しかし残念ながら、私は取材記者のようなプロでも、そういったことの経験者でもありませんので、次年度一年間でやれる数は、地域の広さも考え合わせますと分区１人でも手に余る数だと思っています。事情お察しください。また分区からの推薦期限を７月 31 日に設定させていただきましたが、静岡・山梨 11 分区の 11 名の方を全員訪問し取材して、それを文字原稿にしさらに月信仕様に編集するという作業をへて、年度内に終わらせるにはかなりの労力と時間を要します。本事業の実質的なスタートは今回のこの地区協からということになりますので、逆算しますと７月 31 日でも遅いくらいに思っています。しかし、事業が１年にわたるからといって分区ごとに期限を変えることも公平を欠きます。どうしても期限に間に合わないというところがあって、それでも構いませんと申し上げたら、どんどん後へずれ込んでし

まい事業が遂行できなくなる恐れが生じます。日程的に窮屈で申し訳なく思いますが、よろしくご理解とご協力のほどお願いします。
そのほかの取り組みといたしましては、もしご希望があり、前段でお話しました「職業奉仕を共に考える」というような話でよろしければ、クラブ例会での卓話要請にも出来るだけ対応したいと考えています。

続きまして、各クラブにおいて委員会活動計画をご検討されるとき、ご考慮して欲しい目標項目についてご説明申し上げます。職業奉仕委員会の特性から考え、クラブの内部に向けての活動と対外的な活動に分けて考えてみました。
まず内部的なものとしては、第１に職業奉仕委員会所属の委員の皆さんがまず職業奉仕について理解を深めることが第一歩となると思いますので、随時委員会会合を開かれて勉強会を催していただきたいと思います。そしてその成果を職業奉仕の時間などの例会プログラムの中で皆さんに伝えていただきたいと思います。
２番目には、クラブフォーラムや情報集会のテーマとして職業奉仕を取り上げ、ロータリーの提唱する職業倫理と職業奉仕理念、またその実践について全員で考える機会を作ることも検討してください。情報集会については、そのノウハウの情報資料がお入用のクラブがありましたら、私が持っておりますものをご提供しますのでお申し出ください。参考までに申し上げますが、私の属する甲府北クラブでは毎年開催しておりますが、親睦を深める効果も高く、人気のあるプログラムになっています。
３番目としましては、職業分類卓話を聴くことです。ロータリアン以外の専門家や著名人を招いて話を聴くことの意義はもちろん否定されることではありませんが、自クラブの会員からその人の職業、職務にかかわる職業倫理に裏付けられた経営理念や組織管理の手法また財務会計の要諦などを聞いて学ぶことに、例会卓話の意義があります。もちろん自クラブ会員ばかりでなく他クラブの会員であってもいいわけですから、志を同じくするロータリアンの話を聴く機会を多く作ることが大事であります。
４番目は、３番目と密接に関連しますが、「百聞は一見に如かず」で、より具体的な学びの機会として実際に会員の事業所の様子を見せていただくことは大変有意義なことだと思います。

次に、対外的な目標としては何があるかについて申し上げます。
１番目としては、新世代並びに社会奉仕委員会と連携して、インターアクトクラブや自クラブの所在地区内の小中高の生徒を対象にした事業所見学、職業体験や職業講話の提供などのプログラムを組むことです。当委員会の中村光次副委員長は、学校当局はもちろんPTAと商工会議所の協力も得て、小学生の職場見学を実施して成功を収めた経験をお持ちだそうです。また落合恒雄委員の南アルプスRCでは、県立白根高校の生徒に職業体験をさせたいという要望をクラブがすくい上げて実施したところ、これがきっかけで白根高校にインターアクトクラブを誕生させたそうであります。
２番目には、クラブの所在地区内の非ロータリアンでロータリー精神に適う事業者の表彰であります。一般的に行われているのは、会員事業所の優良従業員やいろんな分野で功績のあった一般人の表彰ですが、これはロータリーが行うものとしては如何なものかと思われます。いわゆる商工会議所や法人会の行う優良従業員表彰や、県政ないしは市町村功労者表彰となんら変わることなく、何でロータリーがという疑問が生じます。ロータリークラブに入れたいような、自分たちが見習いたいような人を発掘して表彰することは、社会のロータリー理解と評価を高めひいては会員増強につながると思います。
最後の３番目としては、これはなかなか難しいことではありますが、ロータリー・ボランティアであります。ロータリー・ボランティアには国際レベル、地区レベルとクラブレベルのものが考えられますが、私がここで申し上げるのはクラブ・レベルのロータリー・ボランティアです。専門職務に携わる人や特殊な技能や資格を持つ事業者、例を挙げれば医者、弁護士、農業、林業や漁業に携わっていて自分の職能や技術をボランティア活動の支援に使ってもいいという会員と地域社会のニーズとを

組み合わせることです。ですから奉仕を望む会員の発掘と地域社会内の組織、プログラムやプロジェクトの調査が必要になります。これはクラブのすべての会員が対応できるというものでもないので難しい側面がありますが、ある意味では新たな職業奉仕の機会作りにもなることは確かです。

以上で活動目標の説明は終わらせていただきますが、添付しておきました資料は委員長さんご自身の参考資料としてはもちろん、クラブの委員会活動の中でもお使いいただけるよう用意いたしました。小委員会につきましても、一度作った委員会は変えることも廃止することもできないということではありません。各クラブの細則の第７条委員会の第１節の中に「会長はまた、理事会承認の下に、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕および国際奉仕について、必要と考える特定分野を担当する委員会を設置するものとする。」とあるはずです。クラブ奉仕と社会奉仕については、特定の小委員会の設置規定が同じ第７条にあると思いますが、職業奉仕の小委員会は各年度の会長の考え次第で何を作るかあるいは作らないかを決めればいいことになっています。各年度単位で特定分野の委員会を考えていけばよいのであります。しかしほとんどのクラブで小委員会は設置しないと思いますが、小委員会を設ける場合には「クラブに設置が推奨されている職業奉仕分野の小委員会」が参考になると思います。また委員会設置や活動計画策定の際の参考になりますのが、職業奉仕関連の情報資料の中に上げておきました「あなたの地域社会における職業奉仕」という教科書的な小冊子です。インターネットで入手するか、日本事務局から購入してください。ご活用いただけたら幸いです。

最後にもう一度申し上げますが、私たちが次年度関わる職業奉仕は、つまらない部門でも忘れられた部門でもありません。ロータリーのエッセンスです。この職業奉仕委員会ほどロータリーらしくやりがいのある委員会はないと、私は確信しております。職業奉仕委員長の皆さまがたのご指導によって、クラブ内でもう一度職業奉仕の何たるかについての勉強の機会をおつくりいただき、また適切な実践のテーマを設定されまして、職業奉仕がどれ程重要で意味のあるものなのかを再確認する年度にしていただけたらと思います。

質疑応答並びに意見発表

意見：酒匂謙次氏（藤枝ロータリークラブ）

私も突然なんか職業奉仕委員長ということで、ロータリアンとして未だ５年くらいで何も一生懸命やっているという意識もないまま今日、委員長のお話を聴いていてその通りだと思っております。しかし私の中では実は足りないと思っていることがあります。というのはですね、われわれロータリアンにオナーつまり誇りっていうものがなぜなくなって来ているか、ということだと思うのですね。職業奉仕、いま縷々ご説明を賜りましてもっともだと思っております。これはアメリカから発祥しておりますので、それこそマックス・ウェーバーのピューリタニズムと資本主義のことですね。まったくその通りだと私思っています。ただ足りないことがあります。ロータリアンは地域のリーダーですから、従業員を抱え、取引先のディーラーさんなどに対していろんな影響力のある立場の人間の集団であります。そういう集団であるわれわれがどのように見識を深めて、そうしてそういう人たちが自分の職業を通じてやっていくことが、やはり国家の安定、繁栄にどうつながっていくかというところを入れるべきだと思いますね。

それで先ほどおっしゃられました研鑽の場所、まったく飯を食っているだけですよ。研鑽の場所ではないですよ。だったら（ロータリーに）入らなくても自発的にリーダー役を果たされている方は一杯いらっしゃいますよ。社員に対して国際問題、社会問題それから今やっている企業の問題などすべてを話されて、その地域に貢献されている方はいっぱいいます。敢えてロータリアンといわなくてもいいと私は思います。だからそれが何でロータリアンだといわれるところを出さない限り、ロータリーの魅力なんてないですよ。やっぱり職業を通じてリーダーとして、オーナーとして社会にちゃんと責務を果たす、それがロータリーだというところを打ち出さなかったら、この集まりは形骸化していくと私は思います。やっぱり先発国で会員数がどんどん減っているというのは正しくその現われだと思いますね。

いまノブレス・オブリージュ（noblesse oblige）という言葉が良く出てまいります。高貴な身分

の人たち、いわゆる影響力ある人たちには義務があるということです。義務があるということはまさしくこういう事ですよね。従業員、地域、係わりある方に対して、広い見識を持ったリーダーがそれだけのことを果たすということです。果たす義務がありますよ。それをやらない限り日本の国家安定はないと私は思います。先ほど申されましたプロフィットは、リーダーを囲む者が与えてくれますよ。それにふさわしいリーダーが存在すれば当然与えてくれます。そういうことを考えたとき、ロータリアンとしてまず足りないのは、研鑽の場所がなってないことです。これをどうするかに懸かってくるかと思います。

コメント：青柳リーダー

同感でございます。今日申し上げましたことも、酒匂さんがおっしゃられましたように、私たち職業奉仕委員会のリーダーたちは大変な役割を背負っていると思います。ある意味ではクラブ全体の目を覚まさせる役割を担っているといっても過言ではないと思います。ですから勉強の機会をたくさん持ってください。一杯やりながらでいいじゃないですか。最近どのクラブもそうだと思いますが、私どもが入った頃は、結局会合なのか飲み講なのか分からなくなってしまったけれど、委員会だといって飲んで果ては歌って肩をだいて、だんだん先輩と距離が埋まっていって、「あんたそれ違うよ！こうだよ。」「あ、すいません」って頭をかきながらロータリーを覚えていったものです。丁稚奉公みたいなものだったんですね。そんな機会は皆さんのクラブでも以前と比べて少なくなっていませんか。職業奉仕は何でも屋だと思われていますから、何でも屋でいいじゃないですか、ですから何でも屋でやってみてください。そしてたまには職業奉仕委員会へ勉強に来いやとみんなを呼び込んで、宴会をえさに釣り上げて楽しく議論をして、真剣なときは真剣に、愉快なときは愉快にやるということで取り掛かってみてはいただけないでしょうか。そうすれば先ほどいった例会においてもだんだん距離が詰まってくれば、お互いに「やあやあ」という事になりますし、そうすると「ちょっと相談に乗ってはくれないか」とか「それはいい考えだね」なんてことを言い合う機会が増えてくると思います。
以上補足させてもらいました。

コメント：中村光次サブリーダー

酒匂さんから大変いいご意見をいただきました。今のロータリーの活動あるいは例会に満足していらっしゃらない方はだいぶいらっしゃると思うんですが、具体的に何かこうしたらいいではないかというお考えはお持ちでいらっしゃいますか。

補足：酒匂謙次氏

会員の卓話をもっと増やすべきだと思います。いま外部卓話だとか眠くなるような（あるいは単に）面白いような話程度で終わっています。一生懸命やっていらっしゃる事業主またはそういう方々の集まりですから、一日一人ということでなくても 10 分でも 15 分でもいいと思いますね。日々（みんなそれぞれ）改善しているわけですから、私だって話せといわれれば 365 日話しますよ。そのぐらいそれぞれ改善活動をやっていることをお話いただく中に、会員の中にもう一度本当の交わりが出てくるのではないでしょうか。私申し上げますけれど、ロータリアンとしてのオナーがないですよ。名誉っていうのが今は感じられません。だからやはり（会員が）辞めていくと思います。数年前までは寄付行為でも何でもいいですよ、ロータリアンというのはそれなりのステータスがあったと思いますね。それなりのこともやってらっしゃったと思います。今この状況の中では「ロータリアンなんて何だっていうんだ」と開き直る人たちは大勢いますよ。ちゃんとした実質的な活動をわれわれがやっていかない限り、リーダーとしての義務、ノブレス・オブリージュを果たし、これがロータリアンだというのを示さない限り、オナーを回復することは出来ないと思います。ですから、それを研鑽する場所で会員の日々の努力をもっともっと発表していただくというのが一歩だと思います。

コメント：中村光次サブリーダー

ある意味では激しいロータリーの現状についての考えというか、反省と提案であると思います。

コメント：岩波政雄アドバイザー

先ほどの（酒匂さんの）話は非常にいい話だと思います。今は外部講師をやたらと頼んで、その話を聴いておしまいというようなことが非常に行われているようです。私もそういうことには何か空しいものを感じておるわけです。それぞれ自分のクラブの中には、素晴らしい良識を持って話をする人がいるわけでして、そういう話は聴いていて会員は本当にひきつけられる思いをするわけです。そこに人を発展向上させていくものがあると思うのです。外部の話も時によれば大事でしょうが、ずっと外部だけに頼むということではなしに、やはり内部の日常非常に努力しているような人の話を聴くと、自分が知らなかったことを教えていただけるという気がいたします。外部の人の話というのは標題が分かっていればおおよそ内容は見当が付くものです。内部の人の話というものには、何を言うのだろうかという（興味に満ちた）面白さと熱心さがあります。その辺に（会員卓話の）利便性があります。酒匂さんが言ったとおり、大いにクラブの会員を利用して、会員に話をさせる機会を多く持たして、そのことによって融和を図っていくということが出来るのではないかと思います。ぜひそのような考え方で進めて、やってください。

質問：佐村裕義氏（河口湖ロータリークラブ）

今日の青柳委員長の職業奉仕のお話は非常に明快だったと思います。今までとかく分かりにくい話が多かったけれど、よく理解できたと思います。といいますのは、最初の中村さんがおっしゃったように今までは、(職業という言葉の前に）奉仕という名前が付いているので、とかくボランティア活動みたいに、自分の職業でボランティアをやるのが職業奉仕だ、といっていた人が多かったと思うんですね。そういうことで、奉仕という言葉が私は曲者だと思うんです。これは（本当の意味は）むしろ世の中の役に立つということだと思うんです。

私はロータリーに入って 12,3 年になりますが、その前はロータリーのことは全く知りませんでした。私の会社でも、いわゆる品質管理活動に取り組んでいます。その中ではお客さんに喜ばれるような製品とかサービス、これを如何に合理的に造り出すかという仕組みを作るのが品質管理活動なのですね。これは製造であれ、営業であれどこでもそうですし、また単に経営者の問題ではないのです。品質管理においては、お客さんというのは次の工程もお客さんだというわけですね。後工程もお客さんなんです。後工程にも喜ばれるようにするのが品質管理なんです。エンドユーザと面と向かい合っている末端の従業員はもちろん、経営トップもそうですが、世の中のお客さんにどうすれば喜ばれるかを、サービスなり製品なりを通じて追求してきました。それら全てを品質管理という形で徹底してやってきましたので、私は職業奉仕ということは（正しい知識さえ得られれば）割りにすぐ理解できたと思うんです。ところが長い間いろんな方がいろんなことを言っていましたし、訳の分かんないことをいっていたと思うんです。今日は本当に明快なご説明があったと思います。

その中で私が一つだけ質問したいのは、同業の中での共存共栄であります。お客さんに喜ばれるようにして（なおかつ）利益を得る、つまり効率的に造るということは利益を得るためですね。それを同業の中で競うわけです。価格はお客さんが決めるわけです。いくらコストがかかったからといってコストに利潤を上積みして価格を決められないわけで、そういう意味ではいくら高くてもお客さんが喜ぶものならその値段でいいと思うんですね。いくら儲かったっていいと思うんですね。そういうわけで適正な利潤とは何かっていうと、お客さんが喜ばれるものが適正なんだと、それでいいと思うんです。同業他社との共存共栄は理想ですが、競争に負けてあるいはサービスが悪かったりすれば当然社会から脱落していくわけです。それとロータリーはもともと、会員は同業一社で出発したわけですから、同業を排除しようという側面があったのではないかと思うのです。ですから同業との共存共栄は理想であって現実はそうではないのではないかというのが私の疑問でありまして、そこのところをお答えいただきたいと思います。

回答：青柳リーダー

ロータリーが最初に出来たのはシカゴクラブですけれど、最初の定款は二項目しかなかったんですね。一つは親睦、もう一つは互恵取引ですね。何か商売をするのにその業種の人がいたらロータリークラブの会員とやりなさいと奨めたわけです。ですから当時作られた会員名簿は業者名簿となんら変わるところがなかったのです。しばらくするとロータリーの内部からまた外部からロータリーの利己的な面が指弾を受けて、その後だんだん変遷を遂げていったわけであります。

さて、ご質問の共存共栄をどう考えたらいいのかということであります。先ほど奉仕の理想のところで申し上げましたとおり人間には欲がありまして、この欲は生理と結びついておりますから抑えることはなかなか難しいものです。しかしロータリーではそれを「ロータリーの理性（職業における実践倫理)」で押さえていきなさいといっているわけです。そこで同業他社とどういう張り合い方をしたら良いのかという事になります。同じ製品を価格競争で勝っていくか品質競争で勝っていくかの選択は経営的にはたいへん難しい問題であります。ただそこでロータリーが言っていることは、倫理にもとるような競争は抑えなさいといっているのです。ですから競争そのものを止めているわけではないのであります。しかし結果として同業者を泣かせるではないかという事になりますが、それは適正な競争をやっていて負けていくのだったら（負けるほうに）努力が足りないということになるわけですから、われわれが資本主義社会、市場経済原理の下で事業を営んでいる以上止むを得ないことです。そして自分はロータリーで教わっている実践倫理に照らして何らもとることまた恥ずることはやっていないという信念が持てるなら、それはそれで自然なことだと思います。

意見：久慈直太郎氏（清水ロータリークラブ）

先ほど酒匂さんが例会で卓話をもっとやったらいいではないかおっしゃっておられましたが、私も同感です。ただ、これはうちのクラブの例ですが、趣味とか教養の話が非常に多くて職業関係の話が少ないんですね。

中村光次副委員長は私のクラブの会員ですが、この前自転車の面白いお話をされていました。そういう職業に関する話もいいんですけれど、自分の工夫しているところとかこんな改善をしているよといったところは、自慢話めいてなかなかやり難いところもあるんではないかと思うのです。ですからそういうことに対して、われわれ職業奉仕委員会が（卓話者に)「ぜひ話の枕のところででも会社の近況なりまた職業奉仕に関したことを混ぜてください」とか振りを入れてあげれば、卓話の中でそんな話が出やすくなるのではないかと思うんです。私も今期その辺を工夫していきたいなと思っています。

締め括り：中村光次サブリーダー

先ほど品質管理のお話がありましたがそれに関連しましてちょっと話させていただきます。

つい最近ですけど、品質工学で、設計段階のほうが主な、仕掛けを普及しようという作業に取り組んでおります。つい今月駿河ロバスト・デザイン実践研究会なるものを立ち上げます。これはいろんな業種、業界を含んでいます。私は地区の方へ言っていないんですけれど、ロータリーの方も絡んでいることもあってそこに地区職業奉仕委員会の委員ということで入りました。みなさんはいろんな組織や団体に、あるいは地域、業界に関係していらっしゃるわけでして、その中にロータリアンだからうまくいく、あるいは努力をしているというものを持ってどんどん入っていって頂いたら如何かなと思います。

それから、浜松の方で最近職域見学というか職場を見学するツアーを商工会議所絡みでやっておられます。こういうことは山梨の方でも熱心にやっておられると思うのですが、単なる観光や物見遊山ではなくて、そういう職業の場をいろんな方に見ていただくことも職業活動が基盤になるロータリーならではの仕掛けになるのではないかなと感じております。

以上をもちまして分科会を閉会させていただきます。